湖月抄

五

河内文庫藏書

河内文庫

鈴虫 豎并 細 巻ノ名以テ并ニ綱ス号ヲ之 綱手ハすゞむし乃
ふりわすることも 鈴虫ハんやうく いまめいくることもあり
斉ハ源氏がかくこの杖をえうしとありふしとふりもそでがさ
こともじしのこゑをうすぎわり 細 源氏五十餘の夜より杖
まくのゐなり。豎乃并なり 花盃 源氏五十餘 横縫の
源の年なり。文雪万世筆

このたびすゞの
細 持仏をハせうくけられたり
いまこ念誦堂へいでき
ざりあよ六条院の
源の来臨し給つかせ
たまうくちつ給せあふ
師 源氏君の御んざし
みく持仏の御まつりひ
どもせうさ給へやがて
くいわく御念誦堂の
具どもさせられるを
仏は供養れよぶまれさ
るとなり

もつきちやくのたびを
師 は持仏のせめんのたびをあけてうしろの方に法
花の曼陀羅を掛けうら
寺の法会の備之 既 よられ
は帳ハ寺々の帳巻へうら
寝殿よりて取は帳とハ

（細 六条院池の蓮之）（細 廿三ヶ之）
夜ごろもちゝもの花乃盛りに入たの姫宮
の御持仏どもあらはしいそぎまつる。供養をど
させ給。この度びハ御ち（源）の志の御ねんざして。
は念誦どうのぐどもこ御まへくの心さ
せまつるとやうくさうつしを給たさ乃（孟 幡とおほよ）
（仏おほよくろ幡之）
御みどわろしつかうつるわうしきの
ゆかしさをえそひぬをまつりしく花乃（抄 源より志給をさ）
（紫上の御営みにてぞあるべ之）
ふぞいそぎをさせ給ふ。花づくゑの中（師 花机をもうつくる之）
ひたどのれりしあめぞめもわかつうさよ（細 源つゞる之 抄 今の世のこととやうの机之）
らうよおひえあつけられたるんぞくめ
まれねさ便るありよの三のこびしるを（細 仏壇よりまへに 孟 廿三の帳巻と持仏堂）
（みまつくひかう之）
よゆりて みぐしわげくうちろの方より法花の（抄 方の帷をおろさく）

いかし四方にさぬのうこび
らとこれしうべし
しの百りの　細 唐丸方
まてわらせしうちるもの
名義三ニ香是離穢之名人中ノ臭気上薫於空四十万里諸天清浄無不厭也　花 百ぶのくのえ
かりとかきこうかもゐ
りうしの菩薩
細 脇士ハ観音勢至也観経無量寿仏住立空中観音大勢至是二大士侍立左右
あとさきえろさ紫のて
ちもそみと　嗔 是ハ花と頭
て閼伽皿よ入てくとくさ
今もわうふりく人ヨア伽
みちとうくし　細 蜂蜜
こふさ物よハ蜜の入ると
蜜とのぞきうろあよ
かうくらしくうと
ミづうのは物縫浅て
花 天暦九年正月四村上天皇

阿曼荼羅　細 名義集七ニ満荼羅ハ此云翻壇ト
まんだらけなりてきろくのふれが先
まうくとらくきさ花のなとくのへかく
細 蓮花ろくへし　花 世尊衣のかん
まれかるをよへりしの百ぶ乃うらさを
かへし　師 脇士ハ観音勢至
ふきまてりわきぶ仏げうじの菩薩を
のくびやくなんさくつつましりうご而
うはら川らしげすらわりの具ハ例のこさそ
阿加ハ水ト名義集
やうはちのくてあとさきさう紫のさち
細 是ハ日本の事也 河荷葉ノ方
すとくのへてりうえうの肌しと合さる名香
嗔 蜂の寄せのさくし　孟 わわくいしうまえ
こらとうくし肌うくそでえさふかしうる
百歩香と荷葉とを
ひと川かわうま白ひあのひさくいにとまうて縫ハ
六道の苦きのくさめま六ふらせ給てふらう
細 女三ノ宮の持経く
らのはち経ハ浣ぞれはづくらし給ふる

為母后被供養宸筆
法華経有八講
これとぞに此世の結縁
細 源と女三の宮と今生
の表えうとくありうろ
ふちりてる
すゞきのえまうやく
かけうけろ金のえよ
の源の墨付ハゆやく
とし
これとし阿流のけそく
阿 流花紅　細 源氏目
筆の紐ハ別ヨ垂らく

これとぞに此世の結縁にて、あまた
びきうはしめるつきさんぞ、願文よつくらせさ
まりそそハ阿弥陀経しのうえいける
そ、網文のはそかうしふもいぐとでん
やのへとめくくこしは縮すまぬぐむ
こしはきうつしはすゐをあてるよこれ去乃
比阿ひらはらくげめくいとぎかうせ玄
なうひわりてもしむ縮んでめそりや
さまでひきふけうけかうるのすがもり
もすこづきのへまうくやく海るとを
いとうんめづくうりきる軸へうし紐の
さ海るどくいへさしうへりし、これからふ

そのおほんハ導師のま
へにおくべし
めすしてごいのうへに
施け陰蔵のうへに仏と
おなじく経の札をかけ
れるべし河海白金の
説なりやまわり

ものはなつくゑに
抄 女三の宮におかるゝ前
ハ花瑞によするゝ也

そくはうくハ
細 そくじうのやうなるもの

ぢんのけそくのつくゑにすへて、仏のれお
へすぢやうじのうへにそなへまゐり。
抄 法会などにある花瑞也
じやうじのうへて、講師まうのぼり。
小讃 抄 行道のあとに人々あるべし
ぎやうどうの人々まゐりつどひあひ給ふ。
抄 法会のあるべきこと
院もあなたにて出給ふて、宮のおましまれ
孟 源の女三の宮との御ありさま之
おしのびさしのぞきたまへれば、せばげなるに
らすゝらのあつげなるひとびとのあつげ
孟 暑気
あるまじくなるらくちぞさゞめく女
房なる六十人ばかりつどひさぶらひて、このひ
さしのすゑにまでもわらはべなどハさし厢
火取
ふたふひわりどもあやしくて、ふりあふぎまよ
抄 空焼のごとく
しきさ候し
くあふぎちらすをハうちつまのひて、そう

へあうく 孟 源のこゝより
て空焼さるゝはそれまふ
くゆらせり白ひかりや
らんのやうにけする物之堂
銀紙おほく
ぞうせらの 細 識多半 説之
人くひそりうして袖
ぜかわるべしとなん

例の物かつらぬわるかん
牝 女三の宮の方れへくのさ
まをいふ 孟 忘ろくと
すさま安女にもあるべし

あれかしまり 牝そうし
物よりかろうでと云
ほふるべし

とりかなりてまとくけゝる
そのうさは 抄 睦やすあそび
うく源の御すゝめて物かく

みさくハいつくの煙ぞと思ふまでくゆれぬべそ
よけれ。冨士のみねよりもけぶたくゆり
みちたり。いまやいかなるさきざきすぎたり
ぞらのきりハふたがりて、けぶりそりて、の
どうまりのくんじこゝろくべきこと、あれ
まゐりて仏前にあるべきにはありまじ
べくらうすさきぬのあるひ人のけそひ
さびかそでうかゞふべきころ、例のおかく
らぬけはひどもの御こゝろへ給ふ。女三宮ハ人
孟 葉のこゝろへ源が方へ
げにさされまそ、いとちひさくなりしげまそ
抄 源の宮のおまへ
あれかしまりぬ、ぎやうがうのんびゞ
師 きん衣の御几帳之
きうしまれるぞの経、御のまさうじを
とりきみちらくこゝすゝけぞうり、そゝのさま

らぬくせハ女三の社
安所と今ハ各別よ存
しさうとうん也
ちづりてそうふも
細 まへハ人くの身てさを
とし兼より八女三宮
へ物のあるべき事大ア
まうせしあり
きやりまふも気楽くよ
此仏種を源の見るより
つけくも女三の不義ある
くハ花ふもあしまいら
せざるとゆかりをらし
うるさの此りくるとそも
抄 源の心よ女三ハ源の様よ
おりてこそ世とも肯給
りんよ源の状なふうるぞ
とハ云ざりしとし
うるのあうのやどり
一蓮池生のるく㳒各留テ
半座ニ乗華葉一 五會讃 細 五會讃ニ
らすゝ心と 下ス池中花盡満花〻
惣是往生人各留半座ニ一ツ

んぐいれ給ふ川めてこやふも袖のみ
さりまへきさそうこともそでしを
給ひとわられもふか おまとゆづりあへ
奇仏の此さりくひこやつ給もさ後ぐ
ようりさの此りくあとそもりらとよ
よいそんりのとは志ゆしぎりしとおり。
うし後の世まじうれるれのあうれやど
つもよ蒲るくとゆり徊をとそうらおさる
のね
源 とらしそ蓮を帅のしそ乃と契をきそ
つゐのちるくそうふぞりすこさと此硯よさ
しぬうしてうう深するの扇よりきつけ

乗華葉待我閻浮同行
人とせり。今ハ各別よな
るを寄れ別るゝとハい
つり
つぞそうく 細 女三宮の
今く源の心ハ此世まと
めあゆべきとしらくし
まづて おへぶらうく云
終末のるまをちそうり
とも源ハ我一蓮よハも
とまうどとし
七僧 細 講師 讀師 呪
願 三禮 唄 散華 堂達
師 わるゝずくハろせのあく

さうしや
畫 へぶそろく蓮のやどとちぎりてもさ
こぐんやすまじとすんどうさあへれバ。
いふうひあうくをゆり徊しうそさすうあどう
ちうもしひあぐうり。衣と袍とゆり徊し
よろ此氣色なり。例のまこさうちあぐるも
いとわきさ気りまうり此くるらり。さ
れもくとりそうそおまかまつる。此徊う
りらのあうさ後こうろとるみ。さこうろせ
さまぐこ此七僧の法眼るぐもそくべて大
方のこゝろをいはれ業のよとさせまうり。
あやのまそひまそ。けさのぬひめまぞ。

しろうんハ 暁めいや
うきどしられうんの
なみし

てハ今の世まさかえもすぐ
れゆかけききをとを
節 講師の方光ともぐ
進しうらとなよし盃さえ
いそえゆかけきハみれい
なうし さきうハ弁説
なり

しらうんハよりなるべくあらざすとめで 細 第子絶し
きりとやむつりう南りうらと光られ
講師 盃を講席よのぼりて表白とむじ
うらじのいくくくこのなをとやく
細 女三之に出で給のまへ
此世よもされまつるさりとひてひとなれ
れまで おりさうりまりもおぼされ契と 抄 源と女三とのまへなるや
まちわれいとゞ
法花経よむとぶ経 さうくくみるさ後
講師の夕
とあろうくぐて今の世よざえとどく
洞 竜手 覧じ 細 弁舌わるし
まゆかけききうるとにいくぐ人そでひ
でけらいとさうくきれいされ人ぐ
細 内裏のまゆとく
まおくれ経られそぐまのびをくの念誦 久んど
侠者のきゞめし
雲のきりめとかりうることなれどう 全
盃 朱雀院え
らふとも山のきうどもよそりめてしれ

夕のまゝまとまてみふけなる
まで 細 御布施の多を
いり講説をいうまなる附
からの盃面白きなさ盃
し重畳煙嵐之断處
暁寺僧帰 花 偈ども
えりりうとのふ時よ付て
文のるとこりうて面白し
院のところハ 細 朱雀院
世三条宮とも 経紙り
えうろいやござうしなら
おして盃経つり
まくしまそいかがつら
妙朱雀ハ経よハ女三の経
まづさ文られバ三条へ

花 巾 誦経の使し
ねつりひどきとめりれ 誦経のをきあどいとなれ
きさきまざくみそうまなんとしひろごりける
細 六条院之 わかやかれども
院よまうけさせまつりうことどもそぐ 盃 昔思
とかりしありじよのつとすこくぐりける
ともそくいまめしきことぐりのくそ
内 朱雀よりの巾布施のまへ
あされど夕の寺ゆとき前なげなる
まぐ前を花いさりひかわりてきるん
細 前を久かふまうりてくるをれ
偈どもとハくりけるしも今しもんぐうしたれ
きふとし 盃 女三を源の宮子お経て
らうそひくのゆりをすくりうつき安
朱 女三ノ
文経院のはりとたこのはきうどんのそ
やますするれ経きんもつるのてとみ
くめやすらりめぐくゆくまくどまそく
源の御わりのまへ

給ひまでとわりし源乃
くのきひつくみけゑて
いまこ六条院よおりを
あこ

わりそぬせ
源わりそぬ令する此の
それづつりきこし
此よ言よとすかずまし

そうくよつくせ
源氏君はくらせ給ひ
くらふの柏木など思さ
めそろし

まて八ちがひらるゝべし。明暮そへてま
つりゆくらけ給ひつゝんしとゝころん
よわひさひぬべしがよおりそてぬせ
いくくわらせじられどる我いろ限の
らずしとりうすひちてじしとゝて
給ふりの宮もいとら源の中へそのくり
つゝせ給ふの柏どもうらぐくの此さう。
みまとるとしうなる柏どもどもうくし
さて源のいされの三条の宮乃此花よお
さめさせ給へるそてそへさをすてさ源
ぐの此ゐのしくりのどと。源の此そずらん
よりずりすく給ひりすくるなど。あるさ

細 三条の宮へ 咲 女三宮のうらのふつさかて
女三の宮からの内へ
此数へ 此夜へ
孟蔵へ ことく
お朱雀の女三へ此知分のくらう
らめのくへ

ざ源の柏へられの宮のもとてびとりし。こ
源りよいかしうるをうと給。明暮の此し
づさそらへの女房のこゝぐとりゝ志を
のそづてらはおそるべく王が此わつひ
まてるん。いそぎ川うりまうせ給ひる。
柏ばみのやうご蔵のまへ乃なりの色いろ。
糸のさは。とみずしるずべく指まつくるを
まうかりのしるる敢ぞして。そのゝこよ志
あさせまる。此志うひるど。いとる源氏
きうら此命ずるよをうひゆるしるなど
も。此めのとかゝへどもはさるりのふく
けるさきりのも。ころさずまりさるる

五条
乗 源のさせまつて
咲 女三宮のうらり給方の西のうさ蔵へ
孟 忠をつるうかくまのまえ
棚
細 花よるかくへ
後まで女宮とさくつきとうけく
うさせるみゆり

此めしかろへども此
女三の此めのかゝやせ
孟けやうかるくえ分
孺しきもうきなる人も
此身なるなるし

わるまでさるこ[illegible]ね
人すこしもまづ[illegible]
亜流のとくめるふし人
あきさんのあれで引そ
こうふ物とこ[illegible]おはり
ろさんとこおんふうごま
ねぐまでまそ八重のあ
あきさこ流のる列
うり
この船よ中でも
およ和のまでめくま
への中のへいの朱のさそ
とそこうく神ろり
てらせまふとあり亜義
例のかいとあるまでこう
よ　おの流のろうにいひ
あるまうきを花あれ

さみくをつくし例べさ限いろりく
うんるこせ結ろ。さうこをひみ花紙もく
ゆそのそひすこ
とぐろひ
て。和
あるまでこ
すこをまぐりあれいがこのひとる
しう。あいくしさゆくし出ろうわざる
つこ。いこ和
ぞ。亜花よるし梨花よるぬもありとえる
むしどとるみとをまひく風をこし
源ろくりめ多るよ。わろりまて出ろ
ゆこるこまみやうみくるやこるれねさ
流もやくしるやまきへで。例のはころ

ぐるるのすもあろ流
しさるするみと女三
のもろくくそひるく

人くるれこうん出をまひ
るもぐる
亜流のかおるこ和へ和こ
まれ一かせぐるそれもい
ぐとは三のくこ和三条
こてもろくこ出ぐせ
ぐるこすぐよこまそ
こるこえのるりあく
十六和の月ぬぐこ新ぐ

いあるまぐこ
へまむつくここくみこてあるれと。ひと
おそより女三のかこ
ひとめみこ
そよ八こせるぐ
結しづこ
命のるのかこよ
ろくこよるうしと
こしなぐ
つこ結めこ出世のこひこるれで今いりて
女三のかこ
こるれくんやここよ。る結るうにるで。
ぬしまこ
んこをまる
ますこくこうて。ひこぐるれこ
うてこうりおの張とい別こ
の月乃まぐ新くこうる多るよ。仏の結ま

哉八月十五夜よりきそろ
しくらり

あくろのたもと　酒　阿弥陀
大咒 仰 阿弥陀真言し
ぶかいたと結びし源も
此大咒を誦すかし

松むしのうえ　松虫の巻之
孟 松虫うえとある本あり
の文字みえるよしとし

孟女三　つよくおりしてもうしくらうさかお踊川く
わんぜし経よろしき花葉さらに二三人花香
夢とくすくすあらづきのとしれ光
仰あのかまでもんを付て出うちかしき
そろひるかど宮内ら御りくらうらいふら　閼伽器 孟 花皿し 初日
そめきさあるんと
こまそくぶさあへるいと衰ならまし御のま　初 源の女三宮
へかつきに
くりきて虫のかいとあげうきかろくゆ　源の乃す所し
めぐりてそ我もあのびくらずし給。
わきざのおどいとくそくれのぐくさや。
おま虫のねいと志げうとあるなかよとうけ
げなく念くゆかしくるなりよずむしの
ふりあうら経をるやうまかりし。秋の虫のれ　細 源の詞
こゑいづれとるさ中に松虫のうんちぐれ　細 秋の名く二字小言の字ありて
きらして中々のちうかるさ好くをふく。

ことくうきさつくしろ
細 秋せみとうろきまさせ
まふ志うしにいつらぶ家
く吟べきるそもある
へかしとし

いうぞくのあつけ給ん
細 うらうけんるさ虫
とし人がよをききてし
孟 女三のるをとうくませ
よりさて
はかなき此秋とい　細 今めき
そうし源のかのふそうけ
てかりき蔵上るへるき
世を捨てうく　都の御勤
とうりまつさるすそのとし
きふるかうしきれど給出
八経がうしとし
つましかや　孟 まつうよ
何とて秋をうしといひ

盤をし
いとわざしくめとらりつくちすさをまゐる。
仰 おそのやうふいきのぬとし
ちうくなきさつくめうこそしすくるあうかなれ。
細 きみむせとう孟 松虫といふく命長きつぎさとと
きみはうひく命の経をちるあさむし
まそあるべきさしらみ中すをそへえこるぬれ
くやまぢうけさ野のまりだくしおこ歩
おりまぬもいとへぞそんあるむしまるん
ききろうず虫いうくろやまそくいまめひさ
孟女三 え家みへ むしとききけいちう経くうしとし
孟 うそらくしけさをうしのつま人のこと　女三
さ方の秋をばうしとしるみしまらそを
てかつきすぎ虫の我なとゑびやうよの給ふ。
いとるのまめうくわてよ　都 御ろせいうま　源氏
しくやいりくよの外うかしくまみてそそ

まかでしらめてのすみ源の句とし　愚按　花なる此ふすまにそとわかれかなや
そでゆりひのおなけり　く秋をうしとしりにしを世を捨
心もて　細　女三宮を詠
虫によりて　よりどころれは
また思ひざる物をもたり
花すゝき虫ハ女三宮のこと
しへまかり其の御どり
といふハ此世をすてられ
まかんまり女三宮へ
ふうりまかんとおもふを
うとくてくゝることあらし
文法むずくひきことふり
新琴とハ源よみるひ
弾かあるよ久しくめて也
まかしかきさ御数珠ひき
例よりもあはれなるねに
御源の心のよ世の盛衰
何かれの御気のこれ
る故に琴の音も感
慨あるべし

源
心もて草のやどりをいとへども猶すゞ
虫の声ぞふりせぬ　などきこえ給て　きん
の御こと　めして　めづらしく　ひき給ふ　宮の御
ずゞひき　をこたり給て　なをきんに　心いれ
給へり。月さし出て　いとはなやかなるほど
もあはれなるに　空をうちながめて　世
の中さまざまにつけて　はかなく　うつりかはる
ありさまも　おぼしつゞけられて　例
よりもあはれなるねにかきならし給。
こよひは　例の御あそびにや　あらんと
をしはかりて　兵部卿の宮　わたり給へり。

えくこえふかる
孟　紫上の死又ハ女三の宮
くの法るなくれられて
物のねをきこゆ雨かり
つゝひとりごと
御源の御心に法経なれども
あるゝてやうる琴を
ひきたまひしともし
らの此事人までこぼれは
月のえん
西宮記に八月十五夜
徽殿の萩に…人
の詩のこと月の宴あそ
侍る…のさ　宮來經信
うみくまりやるる秋
の月雲のうへとそ…ひや
らるれ　拾遺集

大将の君　殿上人のさるべきなどぐして
まいり給へれば　こなたにおはしますと
きゝて　御ことのねを　たづねて　やがてまいり
給。いとつれづれにて　わざとあそびとは
なくとも　ひさしくたえにたる　めづらし
き物のねなど　きかまほしかりつるひとり
ごとを　いとようたづね給ける　とて
宮も　こなたに　御ざ　よそひて　いれ奉り
内裏の御前に　こよひは　月の宴あるべかり
つるを　とまりて　さうざうしかりつるに　此院に
人々まいり給ふと　きゝつたへて　これかれ上達
部なども　まいり給へり　虫のねのさだめ

月ころはひのいつとても
細 三五夜中新月色
いつとても月見ぬ秋は
なきものをわきて今宵の
のめづらしきかな
けふは世のおなじくぞ
二千里のほかなれども
ちぎりける我世のかぎり
てといひけりと夜の月
よみけんのこともおもひ
出し

めでしあそびはしたまひしとの給ひしくさあ
ちせく、かりしうき宿も月さる霄のひ 源の句也 ひ
孟 四更に月は西申時また月ひかりし
きても御衣をすゝめいひつゝ中にこ
よひのあはれなる月の夜はいげみなほ
こうぞ世の涙にくもりてそゝろに思ひやらるれ
細 柏木也 新 彼詩の故人心といふより柏木の事を思ひ出給ふ也
故権大納言おほせのありしみちをさそり
つけてはいとゞ志のふかゝりしもかりや
けるさうしりのおもかげのなつかしさに思ひ出せさら
うらこそすれ花鳥の色にも書にも 柏木の事をのせ給ふ
めすひまくまいつもひあはれさの、ひとつら 細 うつつさこし
さるうしのさまなどの絵あはせにもいかなる 孟 源氏
もうきあはれ給はぬ琵琶のねにも袖ぬれし

はぬ琵琶のねにも袖ぬらす給

師恐者は其吟悲と云へ
うらは琵琶の音もおもひ

ごとすゝめつゝふし

まことにかすのうちにも 暁 女三宮柏木の事をおぼしめし
給へんとしたまひしのはかなさは思ひ
おもひいへる御様ひのかたはらいたく思ひし 源の
うへ内かたのみもわかしいそぎひとつ 暁 三上を柏木に云ひけるとも 源の句也
すゞしのこゑみゆるおもしろさとて 孟 源氏
のきまへのはかなきはかなさわすれがたけれ 池
まつり給ふ冷泉院より消息ありけるゝ
浩瀚の御あそびのはやまとの給ひて
うちわたりておほいとの式部大輔を
ひきつれてまゐりたりけれど
大将どのは六条院にさぶらひ給ひて 孟 夕霧也 冷泉院へ
しめやかなりけり 冷泉院のく

うられあそびのかぎりはよい
孟 女三の宮のさまは曲すなれど琵琶の事などよ
柏を源の云出るそ

ほせんのほれあそび
細 是より冷泉院より
ほそうそこにあいらるる給
ふ第子院よみけりた
大弁は紅梅の事と式部
大輔は柔園なりけし

雲のうへを　細院さてまし
ませばかり。物うとを
きとぬとい月いりそれ
ぬらし　暁　月もそれ
ぬらしあり　孟冷泉寺
今こそ仙洞それだりけい
をれしらすすこうと　細わうと
秋の月と花とをなる
ぢくいんをれうんん人
よこせどやのくわう。
月ぐくい源まうりをえ
うしと

冷泉院
雲のうへとをうけとうれうすこうみも
物ともれをぬ秋の東の月。ゆのぐくて
ちうこうをえどぐ。孟源氏　ゆくしうくみ月と早下のくをえ
のぐみもわ　孟脱殿ゐれつし
よゆうすゆ　源氏のしゆ　細くも　ゆうのくやう
るうこうこうゆ　源あし　ゆうくをさも
て。ゆぐうををくるうぐけゆし
てよいるうやうれど。まつり給へん
うす

源
月ぐいはれど雲井はうぐうう
宮うこの秋ぐうれうこうゆ
れど。孟源氏の後書記　源　冷の
むりいまのはゆうう海のお

記有の結

師　秋宮うこのとゆ源氏
のはゆうとのこむりに
わうこうはうはうはう
人くの車　孟夜源氏
こ　細秋宮のえんふく
ゆうこんしゆうれと
と秋はまうこるこ

孟夜　細　殺社大臣の
ゆこ系宮ゆうこう
の夜もあり
えくぐうねぐうなり
うこうく　孟夜表布袴
をぐつふゆくゆ下襲を
うこうくゆうゆうこう
しゆうとうりうこう
孟直衣布袴　西宮抄
孟上臈者直長下　養下襲二随便不常事
ゆうこはゆ源氏とうこうこう
二人ぐうりのうこう
うこう　細源の侯を巻こう

ゆうぐけうこうれうこうゆうりはうこ
こうこうゆ　緑　歳　孟二
車源氏のまくゆひこうこ
人ぐうこうこうこうこ
ひゆぐされくゆ　孟源氏と妻妾と出家車に
こうり。大ねゆ。孟夕巻　孟源氏の巻
しゆう限これ　孟系図より
うこうれこうこれ源
ねぐうこうゆ　源
ゆ。ゆけゆうこうこうこうて。月やこうゆ
巻車のこうこうこ面白こうゆ。わうこうこん
源ゆぐわうこ
ゆうこうこうゆうこうゆ。
ゆうこうれこうこ
ゆうこうこうこ海ゆうこうこ

仰事に臨みて揆くよ
〃進退あるべし

人々なり
世をすてゝ志げある法
施するんぞ人と云し　細 盤寿

かくさありしは承をもくらぐさげれど
しきほつくしそがうてとは流らんぞかう
れ給ゆるとは、人のうへんざ後は聊が
しくりてごとひをうくしとやかう
あるとくくかりくまへれど、いてうか
どうさ給はんてひ時く給はひとくの
ひゆくる流りこらやめとく細るすれば、い
ゑどき流きりの我流こりと志く
まとく志がりる流ま給は参らくる
うくだそのよれうてもりくのとや
ましのとろうぞ人なうおのくろく
のとるん事いのとくうくぬうくとちくは

孟大かたとうかくし　仰 信近於義也と云ふ　おと乗の流まりの事也し　冷泉院のし　細 冷泉院の流手段　乍泉院のし　冷廿三葉之見　孟十六段の手書紙院也し　抄 詩も行もありとも也　孟三段のまとも考えれどもし

まのぶもりさくりてさてさん明ぐさ
よふそろぐくりうちくくひくくまうぞ
給、六条院は中院の流まよわまりまて、
流抱給るとゆめし給、今はうう志げるう
流すまゐはおはくともうりおぐな
よとはまけまど、すくうとえひきそん
てらぞれぬ音の流りのうらがちらを
給うりやもしま由しうおてまるはな
みくもつぬ身の為稿まてぞすいにう
ぬくらくとろきくも何とるん我よ
て後の人でよりくくおりくとく
まおらしゆといくてのまきよの

待分奴へし　宗　細 秋路也し　孟元よう得の祖也

多くとつね　細 徒然草
どうもうりておうくも
つねと平大の祖也
師 彼為善ならせんべ
まくへのやうまへあすく
又徒洞の流くよいうさ
くし
我れ後のへとま　孟 我
よう為さんらんとお
らしよかし對状段二
源の祖也　仰 植家説解

月秋女三宮をぞ皆世
と宮こと給はせとそれ
福本きぶのゐ世をそ
れをふんうゐ
ゐゐゐゐゐゐゐゐ
くもゐゐゐゐ
孟姉妹へおこもまゐる
ゐ 細 我門ひらげ
ゐゐゐゐ
ゐゐゐゐ
ゐゐゐゐ

生のあを絶きうみうの人
のあれうとと
うのうのかもうの伯のう
ぐみ 盂 うをもかの嗔嘻
の焔と清滅うてとと
御年のつりみちとん
てふうとと
うのうの月のうんれも
悔ものぐまとと
そうの浮の用ち物しの墓
かの飛浮さを秋ゐむ
想ちまふをとけ
てうの一んようちとぐと
のうひるとうぐ
目蓮ぐれうとと
花目蓮ぐれうて亡通
を伯ちを伯ようち
しいうりぐ伯よ秋ちす
ふうをわうかや墓母
の餓鬼道よ義ようを
救ちうを盂蘭盆
経よとうり細目蓮救
母経ハ偽作の経也只盂
蘭盆経ようれうとと

細常のうて
みしぐるとい
るのうとも
絵ぐみふ
なうの
細年のつりく
細源の行
細源のん
細余のるう
細源のん
細源のん
細源のん

みて海りのふとこ　初同書

玉こえの女御

細明人女御こ　ぶひ文
ど冷泉院とい女御々
雪ふりを私大切ふ
ぶひ文ことこ盂明ふ
中文も々雪もは鐘
発ふ私冷のは々を
大切よぶ文ふとこ

は對面のられう

盂　細くは對面あるべき
ぶ冷泉院は海
しくて海ふは對面
ぶれまくふりこ
ふこと院位ふさこ
ふふこと初同書

はわうこ　けこはわここれまで上至ア
みぐもふりまるこうぶこれとう
つこまりぶ法文の女御のれわう海
のふこびふく　夕雪こ　いつこまるうびく
しこもたねのこいこんこはこわはこ
海ふこいづれとふくわやすしはやこ
ふこの冷泉院とふふ法はんこ
しいこぐれふ　細冷泉院こ　ほこはこ　ふこ表ふぐはが法
院もつふよいぶうこふふ法しふ
は對面のこんはいぶこうのこはぐこれは
ふうりいこぐこれこぐこうこうやここ
こ海ふこ法こ　初　盂　中文ぐ

中くまでまふこうこ
盂　盂　盂　